

# 思春期の苦しみーメルヘンに見る若者のまゆごもり・脱皮ー

近藤良樹

## 1. ペローの「ろばの皮」・グリムの「千匹皮」

思春期は、ひとの一生のなかで、一番激しく心身の変化するときであろう。ふるい時代には、そういう時期に一時的に社会から隔離する習慣が各地にあった。その古い時代の記憶が、昔話のなかには残されていて、お城とか塔に閉じ込めたり、長い間眠りつづけて、社会と隔絶状態になるような話になっている。ペロー(Charles Perrault; Contes de Perrault)の「眠りの森の美女 La belle au bois dormant」やグリム(Brueder Grimm; Kinder-und Hausmaerchen)の「野ばら姫 Dornroeschen」「マレーン姫 Jungfrau Maleen」等の話は、そういうものになる。そのような隔離は、われわれの時代には、遠い「昔話」になるが、塔や城を、こころを閉じることのしるしと解するのであれば、その閉じこめる塔とは、こころの無意識の領域であったり、父母による束縛などになって、精神分析の方からの解釈にかかるものとなりそうである。そういうことを感じつつ聞き、読むのであれば、「眠り姫」などの話は、現代でも十分に了解可能な話になる。しかし、現代では、直截には、思春期にむかえる危機は、集団をさけて登校拒否をしたり、非行とみなされるような方向にいたりすることになって、世間から隔離されるというよりは、世間のなかにながら自身がこころを閉じてしまう形のものになる。もし、そういう昔話があれば、その方がわれわれの時代には、わかりやすい思春期の話になる。

ペローの「ろばの皮 Peau-d' Ane」、グリムの「千匹皮 Allerleirauh」(イタリアでは「木造りのマリア Maria di Legno」といわれている)などは、まさしくそういう話である。王が妃を亡くして、その後添いに、自分の娘をえらび、彼女は、それを断るために、難題をだしてみたり、さらに醜くなるために「ろばの皮」やさまざまな動物の皮をよせあつめた服を着て(「木造りのマリア」は、木で出来た服をきる)お城から逃れて、下女などになり、長いあいだ惨めにくらしした後で、王子とむすばれて幸福になるといったストーリーをもつ話である。「眠り姫」とちがって隔離はされないのだが、「ろば」などの皮で身をつつむことで、自身の真実の姿はかくし、汚れた醜いすがたで自己を防衛しつつ、世間の荒波にもまれることを通して、その不幸に耐えてやがて幸福をむかえるのである。メルヘン(昔話)では、内面的なものは、外面化してわかりやすい形に置き換えられることが多いが、「皮」

を身にまとうとは、内なるところを閉じてしまうことにと読みなおしてかまわないであろう。

動物の皮を身にまとうことは象徴的なものではなく、古くは、そのようなすがたに実際になることもあったようである。昔話にある、塔へ閉じ込めるような話が、現実史のなかで、我が国でいえば産屋や月経小屋への隔離という対応するものをもっていったように、フレイザーによると、皮を身にまとうことも、その現実的な習俗をもっていった。少女は、生理を見るようになると隔離されることがあったが、その隔離のあいだ、太陽光にさらされないようにするために、毛布で身体をすっぽりおおうようなことがあったという (cf. J. G. Frazer; *The Golden Bough*. ed. by R. Fraser. Oxford University Press. 1994. p. 686)。

ウラジーミル・プロップ『魔法昔話の起源』(斎藤君子訳 せりか書房 1983年 134頁以下 参照)は、皮を着ることについては、それはからだをあらわれないことや墨をぬることと同じで、姿を見えなくして識別不能にし、あるいは「死の国」にいることを示したのではないかという。死をもってする再生ということで、通過儀礼における変装である(動物の皮を着るのは、その種族のトーテム動物そのものになることであったろうともいう)。

なお、「千匹皮」などでは、お姫さまは家を飛び出すが、それは、自分の父親である王から結婚をせまられることを理由にしている。不安定な思春期なのに、一層追い詰められて、家出するかたちになるのだが、これは、ふつうの家庭のありかたに照らしていうと、実に奇異なことがらである。妻の連れ子ということなら、父親は、その子を成長とともに、もともと他人なのだからと見直すことができ、これを妻にすることへの抵抗感は或いは少なくすむのかもしれない。しかし、子供の方は、父親というレッテルを貼って、そうインプットして育つだろうから、それを夫というレッテルに貼り替えることは、そうとうに難しいことであろう。真の父親のばあいは、やはり、子供と同様に、「わが子」を「妻」のレッテルにはりかえるのは困難ではないか。この種のメルヘンは、まますごいとはいわない。真の親子のようである。つまりは、さしあたりは、奇異な近親相姦を語っているもののように見える。それとも、なにか古い時代の痕跡がそこに見い出されるべきなのであろうか。フレイザーは、ふるい時代の痕跡をそこに読み取って、娘との結婚について、王位は妃によって保証され、王家の血を代々受け継ぐ女性をめとることで王となるということがあり、そういうばあい、王は、妃をなくしたら、妃の娘つまりは自分の娘と結婚しないとその王位を継続できないということがあったのではと論じている (cf. Frazer; *ibid.* p. 316f.). 精神分析の方面では、これを、父と娘の結びつきのふかさを示すものと見るこ

とになりそうだが、それは、ごく近代的な一部の親子関係をそこに読み込むだけのことにとどまろう。それよりは、フレーザーの解釈の方が説得力があるように思われる。

## 2. 男のばあい

男子にもまた同様の話がある。グリムでは、「ろばのわかさま *Das Eselein*」「ハンスはりねずみ *Hans mein Igel*」は、ろばやはりねずみの皮をきて生まれる。前者は、大切にそだてられ、後者は、放置され森でひとりでくらす。やがて、とおい国のお姫さまと結婚することになり、夜は、ろばやはりねずみの皮をぬいで立派な人間の若者となり、その皮を焼き捨てて、以後ひとのすがたのままで幸せに暮らしたという話である。

うまれた時すでに毛皮を身につけている点では、女子の「ろばの皮」などとは異なった話になろう。トーテム動物としての生まれをいうのであろうか。あるいは、親からいやがられる姿であるから、異類あつかいされ、のけものにされ、一人前のひととして認められない状態をいうのであろうか。生まれてくることが望まれていたのでもなければ、夫婦にとっては余計な存在であり、生活の余裕のない時代であれば、すててしまいたいものであったのかもしれない。生れつき醜い皮をつけていたとは、そういう否定的なレッテルをはられていたということなのでもあろう。現代では、多くの国では、こどもは全員同じように愛されるべきもので差別しないようにと、気を使っているが、かつては、可愛い子とか出来のよい子を愛し、みにくい子などは差別的なあつかいをうけることがごくふつうにあった。それが極端なかたちで昔話に取り上げられているとも考えられる。

似たものとしては、グリムには「熊の皮をきた男 *Der Baerenhaeuter*」とか「悪魔のすすだらけの兄弟分 *Des Teufels russiger Bruder*」があるが、すこしちがった形になる。前者は、退役した兵士が旅をしていて、悪魔と出会い、「顔をあらわない」「ひげや髪をくしけずらない」「つめを切らない」「おなじもの（熊の毛皮）を着続ける」等のことを7年間守るなら幸福をもたらしてやろうと悪魔からいわれ、放浪の間、それをまもりつづけ、7年たって、そのあいだに知り合った女性と結婚して幸せになるというものである。後者の話は、毛皮を着るものではないが、同様に7年間「体をあらわない」「つめを切らない」等々のことを悪魔と約束して、地獄で死者の釜ゆでの手伝いをしつづけて、約束を履行し、この世界にもどってお姫さまとむすばれ、ハッピーエンドとなるものである。

髪やつめのような自身の部分は切り離すことが可能だが、タブー・害悪を背負っている者は、その害悪をそとにまきちらさないために、そういう害悪感染の媒体となるものは一

切、切り離してはならなかったであろう。だが、それ以上に、当人が、より危険な状態におちいるためにそれは必要であった。そのつめや髪が他者のものとなったばあい、この他者がそれを自由にするので、もとの者自身をも自由にできると考えられていた。それらが邪悪なものの手にはいって邪悪な工作をされると、もとの身体にその邪悪なものが感染するということになるので、そうならないようにと注意する必要があるのである。

さらに、いまでも、これはわれわれの間にも見られることだが、幸運にめぐまれ、価値あるものを所有できているとき、これをそのまま維持するために、つまり「つき」をにがさないようにするために、自分自身の身体にあるものをそのままにしておこうとする心性のあることである。身体についているものを洗いながしたり切り取って、「つき」がそれによって逃げ去ってしまわないようにするのである。身体と「つき」とは関係がないと合理的心性は思っただけでも、無関係とまでは断定できず、古い心性が顔をもたげて、両者を結び付けて、その身体の状態をそのままに維持しておく必要があると感じるのである。

あるいは、つめや髪を切らないということは、「何もしない」ことの表現なのでもあろう。なにもかも不動に不変に、もとのままにしておくということである。というよりは、不変停滞の事実をそのことで示すのであろうか。塔にとじこめられるような隔離ではないが、この世界のなかで日陰にいて、疎外された状態に耐え続けるのである。そういう停滞・疎外にたえるといった試練が主となっているというべきであらうか。

こういう試練のとき、未来の光が見えない状態にまで落ち込んでいるばあい、時間は、遅々として、あるいは動かないものと感じられるようなことになりがちであらう。かつ、暗闇の塔などに閉じこめる話では、比較されるものがないから、時間の遅速は、その時点では自覚されにくいであらうが、ここでは、目立つことになる。まわりのみんなは、進んでいくのに、自分のみが遅々として進むことができず、遅れていくのが目に見えるであらうからである。世間から切り離されて隔離された「野ばら姫」や「マレーン姫」などでは、世間に流れている時間は、そこには存在せず、自分たちの停滞は、他との比較がされないため、その隔離されている最中は自覚されることはすくなくなる。だが、「ろばの皮」や「千匹皮」では、世間のまっただ中になげだされてこれにかかわりつつ自己のこころを閉じることかたちをとるのであって、世間の動きは周知しており、その時間的歩みも感じている。その時間に比して、自分の方は、停滞してうつうつとしていると自覚して、みじめさをつのらせることになりがちであらう。

### 3. 鬱病のばあい

こころが鬱々として鬱屈した状態におちいると、極端なかたちになると、おそらくは、価値あるもの・光明はすべて自分から奪い去られ、自己は、陰鬱な空間に永遠に閉じ込めつけられるかのように感じるようになる。ひとは、世界と自己について、ふつうには、融通無碍に、ときに楽観的にときに悲観的に明暗多様に解釈して生きている。解釈のしかたは、その本人のこころの在り方によってまったく異なるものとなる。自身では、エゴをはなれて、間主観的客観的に解釈しているつもりであるが、ひとの子がいじめにあっているときは、「ひ弱な面もあるのでは」と冷ややかに解釈するのに、わが子がそうになると血相をかえていじめるものとその管理者を怒り、いとおいしいこのわが子をと涙するといったことになる。大なり小なり妄想をふくみつつ世界は解釈されているとあってよい。明るい日差しも、解釈者の心身のありかた次第で、とげとげしいものと感じられる。生への気力のうばわれた鬱病では、鬱々とした暗黒の色めがねで世界が眺められるのである。

悲観的になっていて、「光明が剥奪され暗黒の中に放置されている」と自己とその世界を解釈するとしたら、それに見合うように憂鬱なこころもちになり悲哀感が生じやすくなることであろう。鬱病では、さらにまた、おそらく脳内の異常な生理的状态から、悲哀感が生じやすく、これが異常に多発することになるので、逆に、その悲しみの感情にみあうように、自己の世界から価値あるものが喪失・剥奪されていると、悲観的に世界を解釈していくことにもなる。悲しみは、喪失感情であり、自己が悲しみに圧倒されているばあい、世界から自分だけが、ひとりで淋しく惨めに見捨てられていると感じ、したがってまた陰鬱な、自己のみの生の停滞を感じるようになる。世界は、その輝かしい生き生きとした時間を刻んでいるのに、自分は、見捨てられ、世界は自分から遠くにあって、その世界の時間のながれからもはじきだされていると感じることになる。かれの時間は、生きる手がかかりを喪失させられて、うつつと停滞して、なかば死んだものとなる。

悲しむ者は、価値の剥奪・喪失を体験して、自己防衛のためであろう、救済者以外に対しては自らを開くことがなくなって、自己に閉じこもる。鬱病的な状態では、その生は、無力にうちひしがれてしまい、外的世界に向かうことをやめて、自己のうちに閉じこもる。たえがたい陰鬱な状態に苦悶しうずくまり続けるのである。そして、この苦悶は、ぬけ道をもたず、その重くのしかかる暗黒の罰を永遠に耐えつづける以外ないように感じ、憂鬱な現在の時間が停止したままに持続するものと感じることになる。

悲哀感と全般的喪失感のもとでは、現在の陰鬱をつくった陰惨な過去はあっても、未来

の時間意識は存在しにくい。この憂鬱な暗闇が永遠につづくかのように感じているのであり、その暗い現在があるのみで、未来の光は見い出せないのである。ときには、時間そのものが進んでいると感じられなくなるようでもある。鬱病の解説書によると、時計の針の動きは、むなしく空虚に感じられ、それが動いているのは分かっても、そのことによって普通のひとが感じるような、時間の進行は感じられない状態におちいるという。時間が停止しているかのように感じられるとか、時間が自分には失われているともらすこともあるようである。自己の生の停滞状態のなかでは、時間そのものも停止しているように感じられるのである。

#### 4. 内的成熟

そういうように生のうつつとした停滞が時間の停止として感じられるのであれば、「ろばの皮」「熊の皮」をかぶって世間に対して自己を閉鎖して、これにじっとたえるメルヘンの主人公たちにおいては、その時間は、鬱病に似たかたちで、停止状態になっていると見てよいであろう。「ろばの皮」のお姫さまは、家を出て、おそらくはじめて、労働という苦しみの現実を下女として味わう。それからの解放のときなど考える余裕はなく、一生そういう惨めな現在がつづくと感じられたことであろう。こどもの気楽で幸せな時期はすぎてしまい、二度とそれはかえってこず、しかも、一人前の大人のしっかりした生活、なお見い出せないとしたら、さしあたりは絶望的に停滞する以外なくなることであろう。

グリムの「熊の毛皮」をきる男性の話のばあい、かれがそういう苦難の時期をむかえるのは、王さまの軍隊をお払い箱になってからのことである。こどもから大人へという時期の話にはなっていない。王さまのもとでの兵役というのは、王=父に従順な少年期をさし、除隊は、青年期になっての自立だと解釈できなくもないが、話そのものとしては、そうではなくて、ある程度としをとってからのことになっている。この話は、ばあいによると、青年期から壮年期の、一家を背負い社会的にも責任をおわなくてはならない時期のことだと考えてもよい話である。

ひとは、うまれてから30年は、自分のとしを、そのあとは、よくばって「ろば」からもらった18年と、犬からの12年、それに猿からの10年のとしをもらって、むちうたれるろばのように、さらには役たたずの犬や猿のように生きていくことになっているという話があるが（例えば、グリムの「寿命 Die Lebenszeit」）、ひとは、30才すぎからは、ろばのように、家の内外で苦勞を背負うことになっているものようである。少年期、青

年期、壮年期等のおのおのに移行するに際して、ひとは、その変化に対応する必要があり、古いものの清算と、新しいものへの準備・適応に一苦勞をしなくてはならないのである。それがメルヘンにも語られているのであろう。

さしあたりは、これまでのことが通用しなくなり、無化されて絶望的となろうが、それは、新しいところへの移行期なのであれば、鬱病とは異なって、新しいものはなおはっきりとは見えないにしても、希望がどこかに感じられるのであろう。それが、どこかで感じられるから、その永遠にも思われる苦惱に耐えていけるのであろう。自身には感じられないとしても、周囲の見守るひとびとは、それを知っており、それ故に、陰に陽にとこれをささえていくのでもある。悪魔が「7年自分につかえること」を求めるのも、そういうことであらう。

激動の思春期は過去の子供の時代を清算して、新しいところへと飛躍していくために、その準備をする時期である。一時的に、自己にとじこもり、停滞的になることもある。外の世界が自身を元のようにあつかってくれなくなるのであり、自分をのけものにするのでもある。自身でも、新たなものの準備がないのであれば、さしあたりは隠れたい。あるいは、それをふまえて、共同体が隔離という一定の形式をとっていくことになる。

醜い「皮」をきるというのは、ひとつには成長してまゆをやぶって出てくるまでの、傷つきやすい自己の防衛策としてあるのであろう。外敵となるものから自己を守る盾になっているのが「皮」であらう。その内にはすばらしい心身が成熟しつつあるのだが、そのこととなるまでは、つつかれると傷つきやすいから、かたい皮をつけ、醜く近寄りがない装いをしておくということである。移行期にあるものは、不安定であり、どちらの「さし」ではかっても、短かすぎ長すぎて、ぴたりとあうことがなく、度外れであって、醜いものになっているといえる。

醜い「皮」をきているとは、そういう醜さでもあろう。自身でも、どうしてよいかわからないことになり、自分で自分を取り扱いかねる状態になる。だが、皮を着るだけでは、なお積極的にはなっていないのである。ペローの「ろばの皮」では、皮を着て森のなかに逃げて行き、隠れる。が、それは、まず第一歩でしかない。つぎには、そこからつれだされて、みにくい姿をさらして、女中としてこの世間のただなかで働くことが求められる。その試練にたえ、みじめさをかみしめて、苦惱していくのである。グリムの「千匹皮」でも同様に、森のなかに逃げ、木の洞に眠る。そのあと、通りかかった王さまに見つれだされ、城の下女としてやとわられて、水をはこび、かまどの火をたき、下賤とみなされている

さまざまな仕事をさせられるのである。

いまでも、やはり、思春期にはいると、それまでは賢く美しかった子が、急に愚劣なことをはじめ、親の期待を裏切っていくことしばしばである。親から離れて自立していこうという過程にはいつ、それがうまくいかず、自己に閉じこもりがちになる等と、信じられないような「まゆごもり」「脱皮」の様相を示していく。それは、ときに醜く、嫌悪感をもよおさせるようなものになっていく。親たちにとっても、その姿が醜い「皮」とみえることは、親が子を自立の方向に突き放していきやすくなることとして好都合なのでもあろう。

「まゆ」にこもり、醜い「皮」をきて、社会の片隅にじつとうずくまり、生まれ変わるために苦しみ、これに耐えることは、時間的にいうなら、楽しいときが「あっ」という間にすぎるのとは反対で、極端には、現在の苦悩の時間が永続するように感じられることになる。鬱病のばあいのように時間は停止して進展をやめているように感じられることでもあろう。

世間の時間は、とどまることなく前進していつているのに、自分のみが、わが子だけがとりのこされ停滞しているようにも思えるであろう。それが飛躍への一時の休息であり、あるいは、過去の清算と未来の準備期間なのだとしても、その閉じこもって生の停止したような状態を感じつづけ、見つづけることは、そうたやすい事柄ではない。このまま駄目になるのではと、絶望感にとらわれる。親は、子が「みにくい皮」を着て絶望的なすがたになったとしても、それを受け入れる以外ないのである。子は、もう(親の)子ではなく、自立する歳になっているのである。干渉は停止し、聡明で美しかったこどもの「死」をいさぎよく受け入れ、これを見守るしか手はないのである。

しかし、ヨーロッパのメルヘンは、このような時間停止に耐えるなら、輝かしい未来がやがて開けてくることを約束する。その苦悩を飛躍のばねとして、新しい世界への飛翔がなるというのである。醜い「皮」をかぶって、耐えることが、そのためには必要だということでもある。その時の醜い皮は、一時的なもので、心配することはない、やがてはその皮をぬぐ日がやってくると、悲劇をきらうヨーロッパのメルヘンは説くのである。

「ろばの皮」では、王は、お姫さまが家出するまでに、美しい服などを用意してやる。かつ、出ていってからは一切かかわることがなく、お姫さまは、自力で自分の道を切り開いていく。親は、自立のための準備をしてやったら、もう手出しをしてはならないというのであろう。その子の人生は、その子自身が切り開いていかななくてはならない。それにさ

しあたり失敗したとしても、まだ無限の可能性が残されているのである。その子の人生は、そこからまた再びはじまっていく。根源的には、時間は、過去を潔く振りすてて、この現在から、未来へと挑戦していくばかりである。

## 5. 日本のばあい

わが国で思春期の危機的状況をテーマにしている昔話という点から、まずは、「瓜子姫」であろう。この話は、両親が彼女を二階にとじこめて出かけるという点からは、グリムなどでの塔に閉じ込める型の話になろう。かつ、この話は、ふつう、天の邪鬼がとりついたままに瓜子姫の死んでしまう悲劇になっている。ヨーロッパのメルヘンがハッピーエンディングを求めるのに対して、わが国では、悲しい結末をむかえる昔話がけっこうある。瓜子姫の話も、そのひとつとなっている。現実がときにそうであるように、美しく聡明に成長していた、両親に慈しまれていた瓜子姫は、思春期に入って突如として狂乱、狂死してしまうのである。

これに対して、われわれも、ヨーロッパのメルヘン同様に一連の、シンデレラ・白雪姫的な、苦難の試練を経てのハッピーエンディングというストーリーの話をもつ。その代表は、「鉢かづき姫」であろう。この話は、塔に閉じ込められるのではなく、世間のなかで醜いすがたになって試練を経て成長していく「ろばの皮」に相当する話である。

グリムたちの話、父親が後に成功するための贈り物を与えているが、われわれの「鉢かづき」では、死ぬまぎわの母親があたえ、それを鉢のなかにいれ、これを少女の頭にかぶせる。この鉢は、結婚の時期までとれなくなってしまう、さしあたりは、やっかいなお荷物となる。「鉢」は、頭が締め付けられるということなのであろうか。ノイローゼなどで、そういう感じをいただくことがあるというが、孫悟空のような「頭痛」の表現と見てよいのかもしれない。あるいは、フレイザーによると、少女たちが隔離されるばあい、顔を帽子や服で隠すようなこともあったというが(cf. Frazer; *ibid.* p. 687)、その一種なのであろうか。御伽草子の絵によると、その鉢は、中世の女性のかぶっている大きな帽子によく似ている。

「ろばの皮」に一層似た話としては、われわれには「姥皮」の話がある。それは、ときには「かえるの頭巾」になったり、顔に「鍋の墨」をぬって醜い姿で自己を防衛することになっていたりもする。「鉢かづき」の鉢も、顔をかくす仮面に相当するものとも考えられる。それらでもって真実の自己を隠して防衛するのである。中東の女性のベール

のように、自分を見るが相手からは見られないということである。呪術的世界からいうと、とくに邪眼をふせぐことであったともいえよう。また、仮面をつけることで、さしあたりはこの仮面の表すものそのものに自身になりきるのもある。男子のばあいも、同等で、「姥皮」をかぶって爺のすがたになったり、あるいは「猫の皮」をかぶるのもあり、さらに墨をぬったり、灰をかぶって「灰坊」になるのであった(関敬吾編『日本昔話大成』角川書店 第5巻 191頁以下 参照)。

いずれにしても、これらの話にみられる試練の間は、やはり時間は停滞的であろうが、グリムやペローと同様、「瓜子姫」以外は、その苦悩の停滞の時間をもつことによって、飛躍して幸福を獲得することになっている。思春期は、老年期のように衰退し避けられない死をむかえるものとはちがい、これから、本式の人生が展開していく前段階である。危機的な時期なのではあるが、そこでの苦悩・停滞は、輝かしい人生のスタートを目前にしてのことであるから、この種の話は、一般的には、飛躍を持って、つまりは、ハッピーエンディングをもって、ひとまずのストーリーを終わるものとなるのである。